



A Challenging Job 明日へ 未来へ つながる農業 ②9

下條村親田高原、南アルプスを望む60[㍿]を超える畑で栽培したネギが収穫期を迎えています。飯田下伊那最大級の広さを持つこのネギ畑を作っているのは、飯田市三日市場に住む田口真裕さん(26)。農業を始めてまだ4年目というフレッシュな若手ファーマーです。さまざまな作物がある中で、どうしてネギを？返ってきた答えは「えーと、そうですね…。好きだからです」。

三日市場の兼業農家に生まれた田口さんは、大学卒業後に愛知県内の自動車関連会社に就職。けれどこのまま都会でサラリーマンとして生きていく将来に疑問を感じたそうです。そんなときに、自然と胸によみがえったのは実家の果樹園などを手伝った少年時代の記憶でした。23歳で実家に戻り、専業農家になることを宣言。両親も「大変だろうけれど、いいじゃないか」と応援してくれました。父親に教わったり、みなみ信州農協の研修会で知識を身につけたりしながら、まずはネギとキュウリの栽培を始めました。当初は自宅周辺で12[㍿]程度を耕作していましたが、今年になって飯田市中村や



若さと愛をネギ栽培に賭ける
ネギ農家 田口真裕さん(飯田市三日市場)

下條村に農地を借り、一気に約1[㍿]まで拡大。大きなトラクターや皮むき機なども導入し、ネギの大規模生産に賭けています。

家族と仲間を支えられて

「月1回の土寄せに加え、こまめな草取りも必要。体力を使うので大変ですが、楽しみながらやっています」と田口さんは話します。今年は6月に苗を植え、10月10日から収穫が始まりました。2月までに昨年の10倍近い7千箱の出荷を予定しています。収穫したネギは自宅の作業場で家族総出で皮むき、箱詰め。出荷量の多い日には夜遅くまで作業が続きます。

兼業農家に育ったとはいえ、ネギ栽培については右も左も分からなかった田口さん。本やインターネットで調べながらの試行錯誤がいまも続きます。「よそのネギ農家さんのブログなどはよくチェックします。作業風景の写真なんかを見ると、ああ、こうやればいいのかってイメージがわくんですよ」。

そんな彼を支えるパートナー的存在が、同農協伊賀良支所の営農指導員、窪田政行さん(22)です。県農業大学校を卒業して間もない若手ながら、伊賀良地区と三種地区の野菜栽培について組合員にアドバイスする立場。「田口さん

産地のアイデアでヒット「土付きねぎ」

飯田下伊那産の野菜として近年売り上げを伸ばしているのが「土付きねぎ」です。ネギの生産は群馬県や埼玉県が盛んで、県内でも松本や上伊那がリードしているのが現状。そんな中でみなみ信州農協が目をつけたのが、ネギを土付きのままパッケージする販売方法でした。

畑にある状態に近いネギは見た目が新鮮で、長期保存に適しています。飯伊の小規模農家にとっては荷造りを省力化できるメリットがあります。同農協独自の施肥基準を導入し、全生産者が土壌診断を徹底するミネラル栽培も特長の一つ。青い葉の部分も柔らかいので丸ごと食べられます。

同農協管内における今シーズンの出荷計画は、昨期と比べ20[㍿]増の95万束。南信州ならではのこだわり商品が、関東・中京・関西で注目を浴びています。



◀大都市圏のスーパー店頭で並ぶ「土付きねぎ」。飯田下伊那ではパッケージを変えて、りんごの里やおよりてふあーむなどの直売所で販売しています

記事に関する問い合わせ
●飯田市農業振興センター ☎0265・21・3217



▶家族に手伝ってもらって荷造り作業。葉先を切り、圧縮空気ですくむいて束ね、箱詰めします



◀病気や虫害の兆候はないか、窪田指導員(右)の目が光ります。田口さんとは年齢も近く、なんでも相談できる心強い味方です